

『灰の水曜日』の非独創性

The Unoriginality of Eliot's *Ash-Wednesday*

山形 和美

YAMAGATA Kazumi

Abstract——

The title of this thesis is the Unoriginality of Eliot's *Ash-Wednesday*

This poem is a poem of prayer where mainly some words of Prayers of the established Church are introduced and they unite with common prayers of the poet and the poetic words of the text of this poem: these three genres of the words make up the subtle relations among themselves leading up to a superb unity of linguistic whole.

My thesis here examines the way these words of prayer which are situated at the center of the magnetic field of the poem have these relations with other genres of the poetic expressions. In this situation the poet's mind loses its modernistic characteristic feature and his eyes loses originality, and become immanent, which is the poet's very purpose here.

『灰の水曜日』解説

この詩におけるこれらの定型の祈りの誦句が内在的に、そして背後に秘めているところの〈詩〉以上のものが、この詩の全コンテキストといういわば磁場の中心に座していて、この詩に見られるこれ以外のすべての言葉の相がそれぞれ磁紋様を描きながら同時にこの中心に収斂されているという重大な事実には読者は気づくべきである。

私の論考は、この詩の全コンテキストという磁場の中心に座しているこれらの祈りの承句がこの詩の残余の言葉に関わる様態を検証する。この様な方法によると、詩人エリオットの個性はその様相を廃棄していき、エリオットの非個性が独創を棄てて、普遍的な詩人の相貌を呈してくる。

Key words——

灰の水曜日、灰、懺悔、信仰、祈りの言葉、詩の言葉、ロゴス、終末、絶望、栄光、骨、喜び、沈黙、購い、疑惑の悪魔、救済、インフェルノ、アングロ・カトリック、神の實在、超自然的生命、聖体拝領、マリア讃歌、ミサ、消滅、逆説、放擲、〈否定の道〉、千のささやき、赦し、諦め。

If the lost word is lost, if the spent word is spent,
 If the unheard, unspoken
 Word is unspoken, unheard;
 Still is the unspoken word, the Word unheard,
 The Word without a word, the Word within
 The world and for the world —*Ash Wednesday*, ll. 148-153

「神の顕現とみなされる御言葉と詩とみなされる言葉
 …」
 —スティーヴン・スペンダー『エリオット伝』和田旦訳

ローマ教会のカレンダーによれば、春分の日後の満月後の最初の日曜日が「主の復活日」であり、その前の七日間が「聖週間」で、その週の日曜日が「棕櫚の聖日」となり、この聖日とそれ以前の五回の日曜日を除いて、聖週間の平日の六日とそれ以前の三十四日が「四旬節」を構成する。そしてこの「四旬節」を開く第一日が「灰の水曜日」とされるのである。この日、前年の棕櫚の聖日で用いられた棕櫚もしくはそれに代るものを焼いてとった「灰」を聖職者は親指に取って信者の額に十字を書き「ひとよ、なんじはちりなればちりに帰るべきことを忘るなかれ」(‘*Memento, homo, quia pulvis es et pulvetem revertero*’)という言葉とともに信者はそれを受けて、懺悔を行ずる。この灰は懺悔の徴である。改革派教会でこれを守るのはアングリカン教会であり、そこでは「大斎懺悔式」と呼ばれる。エリオットがここでこのようにキリスト教信仰に執着しているのは、その直前に彼がアングロ・カトリックの信者になったからである。『灰の水曜日』は『荒地』に続き、その『灰の水曜日』のあとに大作の『四つの四重奏曲』が続くのはそのためである。

この『灰の水曜日』は各部が違う時期に公表された。第一部は一九二八年に、カヴァルカンティの詩から来ている”*Perch Io Non Spero*”をもって、第二部は一九二七年に*Salutation evo significando*”という題をもって出版され、第三部は一九二九年に*Som de l’escalina*の題のもとでそれぞれ出版され、全体としては一九三〇年に纏められて出た。

エリオットの言う過去の〈伝統〉圏内にある多くの詩人からの引用や、それらの詩人を含めた人物・事件にまつわるアルージョンをコラージュ風に組み入れて詩世界全体を構築していったあの独自の手法、こういったパステリッシュ風の手法に対して今まで世間が一般に与えてきた意味以上のものがこの『灰の水曜日』という詩には発生してきていることを、私たちは理解すべきであろう。もちろんこの詩に散りばめられている、教会の典礼で確立されてきた祈りの形態の断片とそれらに実際に盛られている言語表現が、私たち東洋の子の眼には何よりも言葉として映り、それらが文脈の中で奇跡的に詩の言葉になっているかのように見えるのも不思議である。そしてまた詩人であるエリオットの才能は、これらの定型の祈りの誦句がこの詩全体の文脈中で宙に浮いていないことを私たちに確信させている。

しかしこの詩をその前後にわたって書かれた『荒地』や『虚ろな人たち』や『四つの四重奏』

などから分かつものは、この詩におけるこれらの定型の祈りの誦句が内在的に、背後に秘めているところの《詩》以上のものが、この詩の全コンテキストといういわば磁場の中心に座していて、この詩に見られるこれ以外のすべての言語の相がそれぞれ磁紋様を描きながら同時にこの中心に収斂されているという事実である。祈りの形に必然的にならざるをえないこの『灰の水曜日』では、個々の言葉が詩のコンテキストとはかならずしも同じでない祈りというコンテキストに組み入れられて初めて持ちうる力を獲得し、前後にわたって書かれた他の作品と比べてこの詩が静的な雰囲気^{うら}を湛えていながら、それらの言葉は、人間的時間が張り巡らした球体に生じた亀裂を通してロゴスとのコミュニオンをまさに激烈なエネルギーをもって行じているのである。

このことをこの詩に即してより具体的に見ていけば、エリオットのほとんどすべての詩作の特徴であるところの、ともすればメランジュに堕しがちなコラージュ的テキスト構造がこの詩ではいかにしてメランジュに堕することから救われているかということや、エリオットの伝統論に立った非独創性がここでいかにして達成されているかということが明らかになるはずである。流謫の運命を選ばざるをえなかったかのカヴァルカンティに始まって、旧約の民たち、ダンテ、シェイクスピアなどのユダヤ・キリスト教圏の子たちや、ホメーロス、ウェルギリウス

などの異教の神々や人々、そしてエリオット自身も含めて、これらのうち永遠に消えない、恨みつらみの一切をかかえ込んでいる魂のための鎮めの祈りが、教会に連なりロゴスとのコミュニオンを行ずる信者たちによって永い年月を経て生み育てられてきた典礼の一部を構成する祈りの誦句へと凝集されているのである。これはあたかも終末のときにこの世のすべての個存在がそれぞれに微細な光の粒子となって、地上より至高の光へと吸収されていく様にも似ている。ここで私たちは、「黙せるロゴス」(the Silent word)を頂点とし、次にそれをかすめ取ろうと志向する典礼の祈りの誦句と、さらにこの祈りというコンテキストにおいてのみロゴスと連なりうる詩人の他の諸々の言葉との三者が、それぞれが他から断絶された異次元にある三者が、構成する内在的ヒエラルキーを、読者はこの詩で感得すべきである。ここまできて残された問題のうち二つはともに、本来的にはローマ教会によって行じられるこの灰の水曜日という典礼をめぐるものである。その一つは、この典礼とエリオットの告白するアングロ・カトリズムとの関係であり、もう一つは、この典礼とこの詩に見られる定型の祈りの誦句との関係である。以下私たちはレイン(注1)に寄り添いこの詩を読んでいく。

第一部は、絶望の告白、断念の誓い、そして神の意志への忍従と服従である。詩は『うつろな人間たち』の終わりのような不完全な句で始まる。一貫した基調音は希望の欠如である——「私はふたたび、ふりかえることを願わないので／私は願わないので／私はふたたびふりかえることを願わないので……」(‘Perch’ io non spero di tornar gimmai)ここでのエリオットの典拠は、グイド・カヴァルカンティであって——それは流謫の詩、帰還への憧れの詩であり、彼はトスカーナの愛する人にそれを送り、そこで自分の悲しみと不如意な健康のことを告げている。

しかしカヴァルカンティへの（^{アルージョン}引 喩）は、エリオットの詩を読むときにしばしば起こる誤りをも表わす。エリオットは試論「批評の領域」（一九五六年）でとうとう反抗し始めた。「詩の説明は、その詩が何からできているか、それを産み出した原因は何であるかを調べることによってしかできない。さらに理解するのに必要な準備として説明がなければならないかもしれない。だが、一編の詩を理解するためには……その詩が何になるうとしているかを掴むような努力も必要である」とエリオットは言っている。

『灰の水曜日』は三度繰り返される絶望の叫び声で始まる——「私は願わないので」——これはエリオットのすでに見たカヴァルカンティからの借用よりも重要である。

「私はふりかえることを願わないので」[つまり、不可能なことだからで]、「振り返る」には二つの違った意味がある——どの方向を振り返るかが分からないという意味と、振り返ることが出来ないという意味自体である。そこで、エリオットは過去に戻ることができず、かといって明白な未来も見ることができないことになり、だから絶望に陥るのである——「私は願わないので。」これは大まかに言って、『ドイツランド号の難破』でかのホブキンズが描写している立場でもある——彼自身の改宗は二つの否定、彼における神への恐れと地獄の恐れ、これは神への信仰の飛翔において解決されるべきものである。同じように、エリオットの絶望は、彼を神へと強いて誘う——「したがって、喜びをうち立てる何かを、創りうる物を持っているので、私は喜ぶ。」試論「F・H・ブラドレー論」（一九二九年）で、エリオットは、「懷疑主義と幻滅は宗教的理解にとって有用な装備であるという関係ある発想」を明確に述べている。

第一部の第二スタンザは、「現世の時間のもろい栄光」の喪失を嘆いている。「もろい」「現世の」とある。だが、エリオットを理想化された場所に連れていき、そこは、「木々が花咲き／泉がわきでるところ」である。この変容の力は木に花を咲かせるものだと、推測するほかないが、もっと重要なことは、それが詩の力でもあるということだ。でなければ、愛の力だ。だが、仮に詩であれば、そのあとには靈感の喪失が続く。もし愛ならば、愛の不首尾があとに来る。それは、いずれにしる「もろい栄光」「現世の一時的な力」である。

第一部の第三スタンザで、エリオットは「祝福された顔」を諦める。その顔は女のものであるが、処女マリアではない——第二部第一スタンザでは、「この婦人は処女マリアがお祈りをしているのを崇めている」のが分かる。彼女は第一部で「マリア色の着物」を着た名のない女である——彼女は普通の人であるがカリスマ的であり、つまりもの皆に恵みを与え、精神の世界とこの世の世界にまったく無意識に立ちただかる——「何気ないことを話しながら／永遠の悲しみを知らないで、また知りながら。」これは、エリオットが第一部で、彼の過去の野望や業績、そして幸福の可能性とともに諦めた「祝福された顔」の人である。

この三重の諦め（「もう何もないから」）が、機能を果たす。方法が確かにすべてであり、何か疑念に抵抗すればすぐに見抜く。こうして、諸君は基盤、つまり底部そのものにぶちあたり、その上に構築していく。これはエリオットの別の詩『イースト・コーカー』における〈否

定の道」の提示に関係している——「知らないことが、あなたが知っている唯一のことだ」と。

第二部は、旧約聖書の砂漠のシナリオである。「私が忘れられ／忘れられたいように、私もまた、そのように身をささげ、目的に脇目もふらず、我を忘れたいのだ。」第二部は消滅に取り組む。それは、三頭の無垢の悪名高い豹で幕が開く。これらの行の意味を問われたとき、エリオットはただそれらの行を繰り返したただけだ。豹は斑点がなく無垢だから、霊的な存在なのである。だがここで私たちはダンテの「インフェルノ」を想記する。

骨は個我の放擲を喜ぶ。骨は感謝に満ちている、骨は「この聖女の慈しみのゆえに」光輝く。その聖女は、直接には何ら責任はなく、この手続きでは触媒のように見える。残っている骨は、一連の逆説をもって聖女に話しかける。なぜか。これらの逆説——「穏やかに悲しみ」「悩みながら心おだやか」——は聖女の信じがたい身分を、彼女の混成の本質（神秘的であると同時に現世的）本質を——「何気ないことを話しながら／永遠の悲しみを知らないで、また知りながら」（第四部）と言われる本質を強調することになる。

第三部は、三つの螺旋階段で語り手が上昇することを描写する。階段は霊的上昇のメタファーである——この上昇は希望や、絶望や、感覚的麗しさのヴィジョンなどによって、妨げられる。第二の階段は暗く、じめじめしていて、腐っていた。第三の階段は中世風で、「イチジクの実のようにふくらんで溝のある窓」がある。上昇はどう見ても霊的なものである——それは一つには、下の方にエリオットは自分自身（「同じあの姿」）が「階段の悪魔」といまだに争っているのを見ることができたということもあるし、もう一つはこれが肉体的には不可能なことだからであった。

登っていくにつれて、エリオットは三つの誘惑を置き去りにする——彼は希望、絶望、そしてパンと結びつく肉体的な愛を捨てる。『灰の水曜日』は絶望をもって始まり、喜びへと向かうが、「喜べるものを／うち立てねば」ならない。その次に、絶望と希望が「まやかし」である——あるいはどう少な目にも言っても粗雑に対立した範疇、キプリングの「勝利」と「災厄」にも少々似ていることに、論理的にはなるのである。

パンは希望や絶望よりももっと込み入っている——「青と緑の着物をきた／頑丈な後姿の人物が／古風な笛で吹いて五月の季節をうっとりさせた。」最初は、エリオットは彼をパンとは名付けていない。彼はたんに「頑丈な後姿の人物」でフルートを吹いていた。しかしながら、フルートは親しまれた小道具である。この場合フルートは「古風な」と、今はない特質も強調されているのも、適切である。

「彼女の両腕には髪がたれさがり、花をいっぱいかかえたその両腕。」さらに、この細やかにエロティックなトポス——髪の毛を通して見える肉に特徴づけられた——は、階段を上っている人によって「気晴らし」として拒否される。

第四部は、聖女による心ならずの、もしくは半ば否応なしの取りなしを扱う。この聖女は第一部と二部の聖女で、「マリア色の青をきた」「沈黙の修道女」である。彼女は死からの救いを——イチイの木から不死性の囁きを告示する。さらに彼女は祝福された状態を提示する——

何気なく「泉のみなもとを強くし、泉の水をすがすがしくした。」

彼女は修道女か。結局、彼女は「白と青のヴェールを着け」、次のセクションでは、彼女は「ヴェールを着けた修道女」であり、それはヴェールを着けることへの参照項目でもありうる。であれば彼女はこの詩では世界と世界の働きを放擲した女だろう。彼女は沈黙の誓いをしたのか。彼女は何も言わない、だが「イチイの木から千のささやき」を通して語る。彼女はまた異常な力を行使する。彼女からの徴が——泉、水源、小鳥の歌などが砂漠の環境に温和な気候をもたらす——「ひからびた岩をすずしく、砂をしっとりかためた。」

夏には、修道女は「眠りと目覚めのあいだの時間のなかを動く」ので、時を^{あがな}贖い夢を贖うことができる——「はるかに高い夢のなかの読まれない姿」を贖うことができる。それは正確には何なのか。時を贖うことは、何を意味するのか。

第四部は、文法的には曖昧なことから始まる——「すみれとすみれの間を歩いた人は誰か」は、当然に予期される疑問符の句読法がない。時の贖いはユニコーンのイメージに対立する。しかし、ここではエリオットは永遠の死のイメージ、消滅した神話次元の動物たちが引く不壊の棺を意図していると、思われる。伝統的に死と結びつけられてきたイチイの木から「千のささやき」が振り落とされるときにうち倒されるのは、この永遠の死である。死のような沈黙が以前にあったところには、今は「千のささやき」がある。だから、時の贖いは死後の命の約束、イチイの木の常緑に内意された約束ということになる。

第五部は、どれほどしっかりと心を定めたとしても、自己を神に委ねることのできない人たちのことを扱っている。だが、最初の部分は要約するのがたやすくはない。それには、二つの主張が含まれる。最初のものは、ことばが失敗するときでも〈ロゴス〉は生き延びるということであり、二番目のものは、むしろ〈ロゴス〉は〈神〉であるということだ。

二番目の主張は、神の实在への信仰についてである。『灰の水曜日』は、エリオットの宗教的改宗からできた詩作品としてしばしば読まれる。これは事実、信仰の心底の本性についての、真の信仰の難しさについての詩である。私たちは、事物がそれ自体の精神を持っていることについて語る。エリオットの緻密な思考は、精神がそれ自体の精神を持っていることを観察したことにある。信仰は、私たちの意志によって、あるいは説得によって、存在を得るのではない。一九三六年にエリオットが『イン・メモリアム』を偉大な詩、宗教的信仰ではなく、宗教的疑惑の偉大な詩と言いつつ、彼はまた『灰の水曜日』の誤読に新しい方向づけをしていたと思われる。パスカルの『パンセ』論（一九三一年）で、エリオットは「疑惑の悪魔」は信仰の精神とは分離できない」ことを主張している。

一九三〇年で、エリオットはアングロ・カトリック派の会員になって三年経っていた。宗教に対する彼の態度は、公的には妥協を許さないものであった。彼は宗教が俗なる衝動といかなる順応もすることを欲しなかった

試論「宗教と文学」（一九三五年）で、近代文学は「自然的な生命に対して超自然的生命が主導権を持っていることにまったく無自覚で、その意味をまったく理解できていないことに、確

信を抱いている。」『灰の水曜日』はまさにこの立場を主張している——自然的な生命に対して超自然的生命が主導権を持っていることを主張している。この作品はその点からすれば「失敗している」。だから、この詩はエリオットの理論的な立場によりも現実には忠実であると、主張することが可能である。しかし真の宗教の難しさがまさに、エリオットを引き付けたのである。真の宗教の要求するところは、手に負えなく、絶対的なものなのである。

そこで、要約して言えば——神、〈ロゴス〉は存在する。だが、種々の理由で、人々はその神である〈ロゴス〉を受け取ることが難しく、神の存在を信じるのが困難であると思うのだ。あるいは、強調点をわざわざ変えてみると、彼らのきわめて異なるそれぞれの生き方において、これらの不信心者には〈ロゴス〉は耳には入らないけれども、その〈ロゴス〉はそれにもかかわらず依然として存在するのである。

第五部の最後の二行は、初めに見たよりは謎めいたところが少ない——「口からしぼんだリングの種を吐きながら／園のなかの荒野、かわいた荒野のなかの園」。「しぼんだリングの種」のなかに引き起こされる人間の没落は、言語次元の結果をもたらした。つまり、幾人かの神学者によると、言語の混乱をもたらした。エリオットはこのような確信を抱いていたらしい。講演『異神を追いて』（一九三三年）で、エリオットは原罪のことを「きわめて現実的で、恐ろしいもの」と言っている。そこでは、エリオットが考えている墮落した言語とは、そこには中心になる権威がなく、相争う個々の声が過剰に満ちている。だから、「口からしぼんだリングの種を吐きながら」というのは一つの言い方——墮ちた、墮落した言語を話すことを言ったものである。「園のなかの荒野、かわいた荒野のなかの園」は、しかしながら、単にありふれた交差対句法の例ではない。それは、人祖の墮落がエデンで行われたのと同じように、救済はこれ以上枯渇しようがないほどに枯渇した土地でこそ可能なのであることを言い換えたものである。

次の第六部では、私たちは、ほかのすべてのことを排除して神の愛に自らを捧げることでできない強情な気質を持ったエリオットというもうひとりの人間に出会うことになる。この詩人は私たちの美しい世界にどうしようもなく夢中になり、それをどうしようもなく愛していて、この世界の豪華な幻想を放棄できないと言えるのである。

第六部は『灰の水曜日』の冒頭の句を繰り返しながら、それを改変している——「わたしは願わない〈ので〉」ではなくて、「私は願わない〈けれども〉」になっている。『灰の水曜日』の冒頭で、エリオットは次のような陳述を提起する——絶望状態にある〈ので〉、自己放棄のなかに救済を求めよう、と。

その二番目のスタンザはこう始まっている——「これらの翼はもはや天かける翼でなく／ただ空をうつふるいにすぎないので／その空はいまやしばみ、かわき……。」この部分は全体として見れば、修辭的に興味を引く。それはその記録部分がきわめて混成的であるからだ——アルカイックなものが会話的、日常的なものに色付けされているのだ。一方、翼が「ふるい」になっていて、この移行はそれ以前の「年取った」や「祝福された」と相応している。他方では、

まったく散文的で現代的な、口語的な調子が見られ、それは強調語の「まったく」によって打ち出される。祈りに色づけされた語彙のなかでは、「まったく」という語は耳には「強引なほどに日常的な」ものと響く。

同じように興味があるのは、抽象的な言説を述べる詩、具体的なものと比喩的なものの断念——それは次のように、命令形で書かれている——「思うて、しかも思わないすべを教えたまえ／静かにすわるすべを教えたまえ」である。

このように、『灰の水曜日』のミリューをおさらいしてきた詩の言語状況の中に、本論のテーマたる祈りの誦句がはめ込まれている現状に光を与え、その孕む『灰の水曜日』に付与する深い神秘的な意味を検証する 때가来た。『灰の水曜日』は一九三〇年の四月に発表された。

ロマン的なエリオットなら、成就されないままにおかれた「埋もれた感情」を残念に思い、私たちの怠惰な心の用心深い慎重さを後悔しただろう。反対に禁欲的なエリオットなら、放棄の徳——そしてその難しさ——を見ることができただろう。だから、エリオットは、「ゲロンチヨン」「アニムラ』『うつろな人々』のような詩で感情の不首尾について書いているのである。同時に、『灰の水曜日』では、エリオットはこれとは反対の価値ある立場を私たちに示している——永遠の真理をよりよくかき抱くために、禁欲的な放棄の立場で、快楽に、この世的なことに、感覚的な情緒に、自我自体などに対して背をわざわざ向ける姿勢を選び取る。そして、この世的なことについてのこの世的な幻想を放擲する自分の意志が、自然界の世界への彼の無力な情熱よりも弱いことを発見するのだ。かくして——

Pray for us sinners now and at the hour of our death,

Pray for us now and at the hour of our death.

Ora pro nobis peccatoribus

Ora nunc et in hora mortis nostrae

われら罪人のために今もそしてわれらの死のときも祈りたまえ、

われらのために今もそしてわれらの死のときも祈りたまえ。

は集団の典礼に直結しない個人の祈りにおいて唱せられる「アヴェ・マリア」から取られたものである。重要なのはわれら罪人と死のときの強調である。また第三部の——

Lord, I am not worthy,

Lord, I am not worthy,

but speak the word only.

Domine non sum dignus

Domine non sum dignus

Sed tantum dic verbo.

主よ、われはかなわぬ身なれば、

主よ、われはかなわぬ身なれば、

ただみ言葉のみを賜いたまえ。

は聖体拝領のまえに唱えられる祈りである。また第四部の——

And after this our exile.

Et nobis post hoc exsilium.

そしてまたわれらが流謫^{りゅうたつ}終わりしのちは

は”Salve Regina”とよばれるマリア讃歌の一部であり、第六部の――

And let my cry come unto thee.

Et clamor meus ad Te veniat

そしてわが叫^{こゑ}びをなんじのもとへとどかしめたまえ

は「詩篇」から取られたもので、いつのミサにおいても唱えられるものである。引用された祈りの誦句はこれで全部である。

つぎに、ここで私たちはこれらの誦句を、例えばダンテ「天国篇」第三歌からの「われらの平安は主の御意のなかにあり」(‘Our peace in His Will’ *In la sua voluntate e nostra pace*)や、『荒地』における、ボードレールの『悪の華』の序詩「読者によせて” Au lecteur”」からの「偽善の読者よ！ わが同胞よ！ わが兄弟よ！」(‘Hypocrite lecteur! mon semblable! mon frère!’)と比較することを強えられる。ダンテやボードレールの句がそれぞれの原コンテキストからはずされて、他のエリオットの詩のコンテキストに転入されるその転入のされ方を私たちはもはや不都合とは見ないし、またこの転入によってこれらの句が達成しえた新しい重層的な意味を理解できる段階に私たちはいる。これらの句がダンテやボードレールの原コンテキストで得ている状況と意味とを片時も忘れないままで、私たちはエリオットのコンテキストのなかで変容された状況と意味をともなったものとしてのこれらの句を受け取るのであり、このような二重構造に見られる強調やその効果こそエリオットが目指したものであったことを理解するのである。このことは『灰の水曜日』に見られる定型の祈りの誦句に集中化されていて完全に当てはまる。

しかしそうでありながらも同時に、当てはまらない異層がこれらの誦句には本来的にあることは見逃すべきではない。つまりこれら祈りの誦句はダンテやボードレールの詩句と同じように所詮言葉でしかないにもかかわらず、それらは『灰の水曜日』という詩のなかにあつては、その詩全体を〈ロゴス〉へと志向させる集約点になっているのであり、したがってボードレールの句が『荒地』で得ているトポスやダンテの句が『灰の水曜日』で得ているトポスとは本質的に異なった層にあるのである。ダンテやボードレールがそれぞれの句を自ら造ったのに反し、エリオットにおける祈りの誦句は誰が造ったものでもない。ここでは、エリオットは自由でない。この詩におけるエリオットの自由を言うとするれば、それぞれの祈りの誦句をそれぞれの原コンテキストからはずして、エリオットのコンテキストのなかに組み入れることにおいてのみ、詩人は自由なのである。

しかしこの種のエリオットの自由は、すでに指摘したところの「黙せるロゴス」(‘the silent Word’)を頂点として、次にそれをかすめ取ろうとする祈りの誦句と、さらに詩人がそれ以外の

創造した詩の言葉との三者が、それぞれが断絶しているこれら三者が、構成する内在的ヒエラルキーにおいて、詩人の言葉がかならずしも持ちえない、かならずしも持つ必要のないロゴスへの志向性を祈りの誦句は当然持っている（だからこそ祈りであるのだ）という事実によって、粹組を与えられているのである。

本論は、これらの言葉が位置する三つのレベルを確認しこれらのレベルが『灰の水曜日』という詩編の構造に一大特質を与えていることを考察したものであった。

最後に私が知っている解釈家が『荒地』を読んで、神経症的な女が髪にブラシを当てている箇所から二つの語を拾い出したのがある――

炉焰をかぶり、串を乗せた女の髪
燃えひろがって情炎の尖端に尖り、
尖端、白熱して人語と化す。やがて凶猛に鎮静せん。

――深瀬基寛訳

ここの「凶暴」(Savagery)と「鎮静」(stillness)という二つの単語が異常にも直感に反したように併置されているのも無理もない。この強烈な逆説に抑圧された激怒の戦慄を感じたのも正しい。私たちがエリオットの詩を読むのはこういった言葉の才能のためである。これこそが、詩自体が投げかける光、光輝なのである。私たちはエリオットの詩、特に『灰の水曜日』をこのように読まなければならないのである。さらにエリオット批評家の中でも屈指の慧眼を備えている二人の批評家の読みを紹介しておこう。

(注1) クレイグ・レイン『T・S・エリオット』(山形和美訳彩流社刊)本書は十分に生きて来れなかったというエリオットの自意識を中核にしてエリオットの人間と詩作品を読み解こうとする秀逸な試みである。

(注2) マイケル・ヘイスティングズの戯曲『トム&ヴィヴ』(山形和美訳 彩流社)の序文をとくと読んで欲しい。このヘイスティングズの序文はこの作品に、またエリオット自身に寄せた決定的な思いを明示している。次はその序文の一部分である。

――
現在重要な問題点は、社会的な悲劇から出現してきた詩の内容である。それが一時代の音楽であるならば、その音楽を告訴不可能なものと見ながら、しかもその時代をそのようなものに達していないものと見ることは、両儀的で曖昧な特徴づけの範囲に留まるだろう。死にゆく世界を寝ずに見張る芸術家でさえも、時代からの罪の赦しを求めることはできないのだ。しかし、もしエリオットの詩が何よりも苦痛に満ちた心情の詩であるとすれば、つぎのような論理的な帰結が依然として残ることになる――苦痛に浸透された卓越性を計量し、しかもこの情緒的な動乱の対象を特定しないことはまったく意味をなさない、ということである。というのも、いかなる犠牲を払ってであろうとも、このような苦痛は分かち合われた体験なのであって、それに与った当事者たち兩人こそが、真実の証人であるからだ。いずれの場合――その時代が要求した芸術家の場合と、自身のオブセッションを携えた詩人の場合の両方――にも、人間の生活という必然的な常数が出現する。弾力性のある伝統の流れのそばで沈滞の状況へと退却する可能性のある影響力を持った、廃退と反動的な閉鎖性の詩人としてのエリオットとパウンドにつ

いての高まりゆく批判を前にして、エリオットから公的な詩人のペルソナを取り除くこと、おそらくボッサムの没個性の擬装を眉に唾をつけて受け取ること、そしてそれに代えて平服の人間を理解し、彼の作品の偉大さをその本来の歴史的な文脈の中で見るために、苦しめられた、自己に夢中になったしゃれ男を置いてみるのが、分別というものであるかも知れないのだ。

(注3) そしてこのように述べるヘイスティングズの思念を見れば、私たちの想念はシンシア・オジックの「T・S・エリオット——〈苦悩する人間〉と〈創造する精神〉」(『ヘンリー・ジェイムズが知ったこと及び他の作家論』一九九四年所収)を書いたシンシア・オジックの発想に向けられる。彼女は、「バート・ノートン」からまず冒頭の三行を引用する——

現在の時間と過去の時間は
 ともにおそらく未来の時間に存在する
 そして未来の時間は過去の時間に含まれている。

先のヘイスティングズのディスクールを受けてであるかのように、オジックはつぎのような、私が知るかぎりある意味ではきわめて卓抜な希に見る読みを行なっているのである。現時これほどの批評が書ける人はそうざらにいるものではない。この言説は、説明するまでもなく、本論の結語にもなっている——

ここで言う過去の時間とは、エリオットの若さに溢れた作品の心理的な混乱期を、「ブルーロック」、「ゲロンチョン」、「虚ろなる人間」、「荒地」などを作り出した罪についてのあの空虚な無知を示していた。罪が現実存在することを認めないことは、自己が頹廃していくときに手も足も出なくなることを意味する。(中略)「燃える、燃える、燃える、燃える」という『荒地』の祈りの言葉は、祈りなど想い描けるようなものではなかった。ところで、「過去の時間に含まれた未来」という懲罰的な句が地獄であることはほとんど確実なことであり、その地獄とは妻ヴィヴィアンであった。……荒れ果てた地——神を剥奪されて裸で耐え忍び続ける乾いた季節——がヴィヴィアンを相手の試練をエリオットに与えたえたのである。……過去のヴィヴィアンが突き動かして罪意識へと押し込んだという理由だけで、エリオットは過去の形而上学の世界での漂流という形定まらぬ荒廃の地から逃避しようとした。すると、未来の時間はどうか——ヴィヴィアンを突き動かして罪意識へと押し込んだという理由だけによって、エリオットは未来の罪の赦しへの手段を表に現わそうとした。つまり自己を罪人として誠実に告白するということであった。

ヴィアンという地獄のおかげで、エリオットは過去の自己を鮮明にすることができた。エリオットは未来にありうべき存在を鮮明にすることができた。ヴィヴィアンがエリオットの精神であったとすれば、そのヴィヴィアンは彼の精神の中にメドゥーサを忍ばせておいたのだ。そしてそのメドゥーサは荒れ狂う美神ムーサとなったと同時に、浄化をもたらす救済者ともなったのである。ヴィヴィアンは悪魔払い、告白、懺悔への動機となった。祈願の詩編であるかの『灰の水曜日』をエリオットに与えたのはヴィヴィアンであった。赦しに近い状態を詠う抑えの効いた叙情詩である『四つの四重奏曲』をエリオットに与えたのも、赦しに近い状態を詠う抑えの効いた叙情詩である『四つの四重奏曲』をエリオットに与えたのも、ヴィヴィアンであった。

上のオジックの言説を読んで、それが今までの私の論説に多くの点で重なり合うのを読み取れない読者は想像力の鈍感さを責められてもやむを得ないだろう。

[参考文献]

- 山形和美『山形和美全集』彩流社第二巻エリオット（上）
山形和美『山形和美全集』彩流社第三巻エリオット（下）
山形和美「ラフォログによる詩人の生涯への飛翔——エリオットの出発点」
山形和美訳、Michael Hastings, *Tom & Viv* 『トム&ヴィヴ——詩人の妻』（彩流社刊）
Edward・J・H・Greene, *T・S・Eliot et la Fance, Editions Contemporaines*, 1951.
T・S・Eliot—POÉSIE Édition Bilingue, Traduction de Pierre Leyris Editions du Seuil, 1969.
Craig Raine, *In Defence of T. S. Eliot*, 2000.
Craig Raine, *T・S・Eliot*, 2006:
Craig Raine, *T・S・Eliot —image, text, context*, 2007
クレイグ・レイン『T・S・エリオット—イメージ、テキスト、コンテキスト』（山形和美訳彩流社刊）内容は二〇〇六年版と同じ。
Craig Raine, *In Defence of T. S. Eliot*, 2000.
Craig Raine, “All jokes aside,” *The Guardians*, March 11, 2008.
R. F. Fleissner, “Eliot And Antisemitism”, *Contemporary Review*, Dec. 1999.
William Cookson, “Pound, Eliot, & Anti-semitism,” *The New York Review of Books*, June 6, 1996.
Lyndall Gordon, “Charges of anti-Semitism”
Anthony Julius, *T.S.Eliot, Anti-Semitism, and Literary Form*, 1995.
Christopher Ricks (ed.) *Inventions of the March Hare*, 1996.
R. F. Fleissner, “T・S・Eliot And Antisemitism”, *Contemporary Review*, 1999.
William Cookson, “Pound, Eliot, & Anti-semitism,” *The New York Review of Books*, June 6, 1996
James Edwin Miller, *T.S. Eliot's Personal Waste Land*, 1976
Cynthia Ozick, “T・S・Eliot at 101: The Man who suffers and the mind Which Creates,”
What Henry James Knew and Other essays on writers, 1994.